

文字化担当＝土田滋氏・新居田純野氏

最初の文字化を中国人学生(福建省出身)が行い、それを、新居田・土田の順番に、点検した(点検は、必ずしもまだ十分ではないので注意されたい)。なお、次の点でも、興味深い資料と思われる。「ヤミ族は典型的なオーストロネシア語らしく、a,i,u,e (= schwa) の4母音ですので、i と e、u と o が曖昧になっています。「臼」を「オス」と発音したり、「蟹」を「カネ」と言ったりするのはそのせいです。その他にもヤミ語の影響かと思われるところも散見されました。」(土田滋氏)。また、最初の文字起こしをしたのは、日本語を話せる中国人(福建省出身)の若い世代(学生)であるが、その耳にはどのように聞こえたのかも興味深い問題であったので、その記載も、【 】(土田修正部分)の前にそのまま残している。(安部記。2009年4月16日 土田氏修正版)

ヤミ族インフォーマント情報

氏名： 廖株(現地名・シャプン・マンガヴァット Siapen Mangavat)

生年： 1925年(大正15年)生まれ

調査地： 台東縣蘭嶼郷紅頭村(日本時代の紅頭嶼イモロッド)

調査時： 1984年3月

収集者：土田滋氏(元・東京大学文学部言語学科教授)

データ提供： 2009年4月1日 掲載許可

Yami1984 桃太郎

(00:00:00~)

A: あのう【ある】、昔からね、ち～さいな、桃太郎さんのことも【子ども】あったそうです。これは、日本からの例え話として、聞いた話があるので。そして、桃太郎さんというのは、桃の中にはあった【入った】そうでして、【ですって。】ある二人の夫婦がおって、あのう、男が【は】山に行って、あのう、家内が【は】河【川】のところに行って、洗濯に行ったそうでして、【ですって。】そして、ある桃は川のところで落ちて、ずっと流れて、えっ【えー】、流れて、あるおばあさんが着いたときには、おばあさんがびっくりして、

(00:02:00~)

この桃お【を】、大きいので、ひとう【非常】におばあさんが喜んで、置き取れ【受け取り】ましたと。そういうこと案内したので、そして、あのおばあさんは、あの桃を、あ【あー】、「これは、取って家に持って行くよ【よー】」とこう思ったので、持っていったわけですよ。そして、夫が帰ってきたときには、あのう、奥さんがこう言いました。「あのうね、大きなもの【桃】が見つけたよ」とい【言】ったそうです。そして、あの夫がこう言いました。「どこにありますか」といったら、「まあ、ここにありますよ」、「見せて御覧なさい」といった【言った】ときには、見せてあげた。そして、見たときに【には】、夫がこう言いました。「あ、そうですか、大きいね、この桃割っと【この桃は】」と、こう、もくさんあんなしたので【奥さんに話したので】、そして、「まあ、これはね、ご飯食べてから、ご飯を食べて済んでから、ね、あのう、いただきますよ【食べましょー】」、夫が話したそうですって。

(00:02:00~)

そして、奥さんは、「あ、そう、いいですよ、」とこう言って、置いたそうです。そして、ご飯を食べて、ご飯を済んだ後に、奥さんがこの大きな桃を皿に入れて、そして、あのう、男は、夫は、よう切れる刀を持って、割れようと思ったので、刀をとりに行ったのであろう【行ったのである】。そして、あのう、男は、その桃を割ったときには、割ったときには、バンと割れて、ちょうど桃太郎さんの子供が出たわけとってるんです。そして、あのう、桃太郎、あのう、二人の夫婦は、えっ、この桃に「どうしてこんな小さい子供がないのかな【あるのかな(言い間違え)】」とこう思って、びっくりしたそうです。そして、子供がないので、そして、あの二人夫婦は、このちいさい桃からでた子供を、きれいに養って、大きくさせたそうです。

(00:03:00~)

そして、だんだん、だんだん大きくなって、とうとう、も【う】成人【青年】になった。成人【青年】

になったときには、ある日、どっかかに遊んで、あのう、どっかかに遊んで、あのう、鬼のところ、ところに行った【行った】ん、鬼のところに【まで】なっていった【行った】そうですって、あの桃太郎は。そして、桃は、とうとうお家に帰ってきたときには、お母さんとお父さんにこう言いました。「お父さん、お母さん、わたくしはね、鬼までい【行】ったんですから、わたくしは、鬼まで行くじゃないか、」とおとう【父】さんとお母さんに話した。そして、あるお父さんとお母さんの話では、「そうですね、

(00 : 04 : 00~)

あのう、鬼はね、人を助けることもできる。力もあれだす【あります】から、まあ、そこで行ったほうがいいじゃないか」と、こう桃太郎さんにい【言】ったそうですって。「まあ、いいですよ、あんたはね、まあ、そこ【ま】で行ってもかまわない。」と【こう】いう、お母さんとお父さんは桃太郎さんに、話したわけです。そして、あのう、ある日、桃太郎さんはお父さんがお母さんがゆる【許】してあげたので、まあ、行きましようかと思っていた【行った】そうですって。行った時には、道端に、道端に、ある、【トル】ある犬が出会ったそうですって。犬は桃太郎さんにこう言いました。「桃太郎さんよ、どこにいきますか」とい【言】ったときには、桃太郎さんはこう言いました。「ええ、わたくしはね、鬼の家に行きますよ」と言ったそうです。あの犬が、「行くなら、私連れてて【トル】くれませんか」とい【言】ったので、

(00 : 05 : 00~)

そして、あのう、桃太郎さんは、「来るなら、ついていかまいませんよ」とい【言】ったら、とい【言】って、犬が喜んで、あのう、ついて行ったそうですって、【。】そして、桃太郎さんと、あのう、犬【が】一緒にまだ歩いて行った。そして、後、(チン ユウレイ)後になると、まだ道のばがきね【道ばたにね (の言い間違い)】、あのう、ばがき【道ばた】には、また、あのう、ねこのかねをもちきた【陸のカニを見つけた】そうです【って】。そして、あるかね【カニ】がこうい【言】いました。「桃太郎さんよ、どこに行きますか」と聞いた【言った】ときには、桃太郎さんが答えた、「え、わたくしはね、あの、わたくしたちは、鬼のところまで行きました【行きます】」と。「そうですか、鬼まで行くなら、わたくしも鬼まで行きたい【ん】」ですから、どうか、わたし、つれてくれませんか」と、という【トル】かね【カニ】が言いましたそうです。

(00 : 06 : 02~)

そして、ある桃太郎さんが【こう】言いました、いいよ、あんた行きたいなら、つれ、一緒に来て下さいと、とい【言】って、そしてあのかね【カニ】が喜んでついていったそうです。そして、三ペットのグル【3名ともグル一つ】とある【歩】いたそうです【って】。あご【あの】、で、あの、鬼のうち【家】までい【行】って、そして、なんか【まだ】つ【着】いていないときには、まだ【また】おす【白】が見たそうですって、【。】おす【白】はこう言いました。「桃太郎さん、どこ行きますか」と言ったそうですって。で、ある桃太郎さんは、「ああ、私はね、おす【白】さん、私は、あの、鬼のうち【家】まで行きますよ」っていったそうです。で、あるオス【白】は、「あ、そうですか、私も、鬼まで行きたいから、まあ、どうですか、私つれていくな【連れて行くのを】、よろしゅますか【許しますか】」と言ったので、そして、あのおす【白】、あの桃太郎さんは、「まあ、あんた行きたいなら、一緒に行きましよう」とこう話したそうですって。

(00 : 07 : 02)

そして、あのおす【白】は、喜んでついたそうですって。そして、もう今度は有名【4名】になった。有名【4名】になって、そして、え、後で、歩いてはらいて【歩いて】、そしてみちまたけ【道ばたに (道畑と誤解か?)】ね、あ【ま】～、たん、あのう、あの、果物似【み】たいなもの、狐狸【栗】、狐狸【栗】というまん丸【い】な小さいな物見つけた。そして、ある狐狸【栗】はこう言いました。「え、桃太郎さん、どこ行きますか」って言ったそうです。そして、ある桃太郎さんはこう言いました。「え、私、え、狐狸【栗】さん、私はね、鬼まで行きますよ」って言ったそうですって。そして、ある狐狸【栗】さんは、「あ、そうですか、私もね、鬼のところまで行きたいとか【こう】思いますから、どうですか、私を、私も、連れて一緒に行かないじゃないかと」と【こう】いうのを狐狸【栗】さんが言いました。

(00 : 08 : 04)

で、桃太郎さんは、「あんたね、行きたいならばね、まあ、一緒に来てもいいでしょう」とああしたそ

うですって。そしてね、あのう、狐狸【栗】さんは喜んでついたそうですって。そして、堂々【どうどう】五名で、一緒に歩いたそうです。そうして、ずっと歩いて、堂々【どうどう】鬼のうち【家】までつ【着】いたそうです。そして、あの鬼は、まだあのひょうろ【昼】になって、まあ、はたきたになった【畑に行った】そうですね。(はたきた【畑】でしょう？) はた、はたけで【畑に】い【行】ったので、だれもおりなさい【誰も居らない】、家に。そして、オス【白】は、あのう、桃太郎さんはこう言いました、「わたしたちはね、隠れましょう。そして、【あの】鬼がこれまで【来るまで】に寝ましょう」とこう桃太郎さんが四人の人に言いました。そして、あ、あの、桃太郎さんは、「狐狸【栗】さん、はい、

(00:09:00)

あなたはね、ア【トル】、窓【竈】の下に隠れてください」といったそうですって。そして、狐狸【栗】さんは「はい」といって、あの窓【竈】の下に隠れたそうですよ。そして、あなたは、オス【白】はね、「あなたオス【白】は屋根の、家の屋根のところに上【登】って隠れなさい」と、とい【言】ったそうです、桃太郎さん。そして、オス【白】は「はい、これでいい」とい【言】って、屋根の、屋根のところにのぼ【登】って行って、隠れたそうです。そして、桃太郎さんは犬にこう言いました。「犬さん、あなたはね、ねどころ【ねどこ】のしたに隠れていきなさい」とい【言】ったそうですって。あの犬さんは「はい、いいですよ」とい【言】って、寝る場所のところの下に、隠れたそうです。そして、あるかね【カニ】は、隠れるところでは、かね【カニ】というのはね、

(00:10:00)

まあ、そうでは、板の下に隠れたら知らんからね、寝どころの下に、板の下で、そこで隠れたらいいよ【、】ね、あのかね【カニ】はね。そして、桃太郎さんは、あのう、外の涼み台で隠れたそうです。そして、昼になると、もう、とうとうと【とうとう】鬼が帰ってきたそうです。お、骨がかえてきて【鬼が帰ってきて】、もうご飯をたこうよ、炊こうかなとこう思って、あの、かまどに行って、そして、釜戸のところで、火を燃やしたい【トル】ときには、もう、事故が【リクが(栗の言い間違い)】、狐狸【栗】さんがね、もう爆発して、続い【そし】て、悪魔はね、もうばじゃん【バチャン】としてふたりた【倒れた】そうです。ばじゃんとしたときにね【バチャンと倒れたときはね】、いぬ【犬】がワンワンといったら、もうかんだらなか【壁に当たったら】もともともわかなく【もともとも分からなく】なった。そして、外に出ようと思ったときも【けれども】、そとそとのわけで、前部先に【出たときには】オス【白】が落ちているは頭にぶつかっても【もう】、

(00:11:00)

あの、あのね、あの鬼はもう、何か、今度、????

B: ひっくり返して【ひっくり返って】

A: ええ、ひっくり返してね、そして、桃太郎さんは、あの、かね【カニ】はね、歯が【歯で?】嚙【咬】んだそうです。??【あ】のかね【カニ】は、お【トル】かね【カニ】はで【出】てね、あのう、おねの歯を嚙んで【鬼の肌を咬んで】、おね【鬼】がもう、もういいんですね、もう痛くても【もう】、「ああ、助けてくれ、ああ、助けてくれ、」泣いたそうですね。そしてね、あの桃太郎さんは、ぞうおくしたそうですって、【手を取って(縛って)しまったそうですって。】そして、悪魔【頭】はね、このオス【白】が悪魔【頭】にぶつかっても【もう】、おてんらも【頭が】、もういしにたえない。【もう石みたいな、あのう、】手出しても【怪我して】、もう悪魔免じ【返事】することもできない。ついて【トル】、三人、あのう、四名と五名とも、みんな笑ってね、悪魔に。そして、犬が【は】、足から【腹か】、どこから【トル】嚙んで、あの、おね【鬼】でね、そして、あのう、おね【鬼】がこう言いました。

(00:12:01)

「まあ、許してください。わたしはね、いま、まあそんなことしないから」桃太郎はこう言いました。「いや、あんたが???悪魔って、人を騙したり、まだ【また】人をごまかしたりするから、あんたは殺さなければならない」と、こう桃太郎さんは、え、話したそうです【って】、おに【鬼】のところに。あの鬼は「いやいや、私はね、そういう昔がやったけれども、今からね、まあ、あのう、こころかわって【心が変わって】、もう本当にこんなことしないようにして、よろしくお願いします」とお願い【言】ったそうですって。あの、桃太郎さんね。そして、桃太郎さんが、「そんならね、いいでしょう」と、「も【もう】」と言って、そして、悪魔のつばった尻尾【縛った紐】をめん【みんな】はず

して、そして、桃太郎さんはそういう昔のときね、そういうことしたので、あるという聞いた話し
あります。

(00 : 13 : 01)

B : ???

A : まふだ? はい。そして、桃太郎さんが歌ったときの??? 【はこう詠いましたね】。

歌の歌詞 :

桃太郎さん、桃太郎さん、おごち【お腰】につけたげれらんご【きびだんご】、一つ私にくださいな、
やりましょう、やりましょう～、これからうねんを【鬼の】征伐に、ついていくならやりましょ
う。と、あの、桃太郎さんの歌であっ、歌で会えます【あります】。はい、これだけね、します。